

まど・みちおさん

ボンガビリア

まど・みちお、本名は石田道雄。戸籍上のふるさととは山口県徳山町（現 周南市）、実感としてはふるさととは地球、それも地球の中心。

まどさんのまどは、部屋の窓。窓を開ければ外が見える。宇宙に繋がる空も見える。窓に憧れがあるから、まど・みちお。一度だけ、女学生趣味みたいではないかと、『昆虫列車』の同人水上不二に手紙を出した。それが師の北原白秋の耳に入って、「まど・みちお、いいじゃないかと、白秋先生がいつてる」と、与田準一から手紙がきた。

それからずっと、まど・みちおで、昭和三八年（一九六三）五四歳で童謡曲集『ぞうさん まど・みちお子どもの歌一〇〇曲集』（フレーベル館）、五年後、詩集『てんぷらぴりぴり』（大日本図書）を出版した。

ほら おかあさんが ことしも また

矢崎 節夫

てんぷら ぴりぴり あげだした

みんなが まったた シソの実の
てんぷら ぴりぴり あげだした（略）

まどさんのお宅の庭に、シソが育っていて、奥さまがてんぷらにした。この詩を読んだご近所の方から、ある時、電話が入った。「お宅ではてんぷらぴりぴり どうやって揚げるのですか。うちで揚げたら辛くて食べられなかった」と。よくよく聞くと、シソの実ではなく山椒の実を揚げていたことがわかった。

てんぷらを初めて食べたのは、まどさんの記憶では祖母セイの法事の時だという。セイが亡くなったのは、大正四年（一九一五）まどさんが六歳の時で、まどさん一人祖父母の所に置いて、兄と妹を連れ、母が台湾で仕事をしている父のもとへ渡った年だ。家族全員が渡ってしまうと、生活費を送ってこないかもと祖父が危惧した結果だった。初